長崎県中南部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象

有 元 光 彦

Morphophonological Phenomenon of the *Te*-form Verbs
in the Central and Southern Mainland Dialects of Nagasaki Prefecture

Mitsuhiko ARIMOTO

(Received September 26, 2008)

0．はじめに[1]

本稿の目的は、長崎県中南部本土方言を対象とし、動詞テ形のデータを挙げるとともに、そこに起こる特異な形態音韻現象を記述することにある。

この特異な形態音韻現象とは、有元光彦（2007a, 2007b, 2007c）等で言うところの「テ形（音韻）現象」である。有元光彦（2007c）によると、テ形現象は次のように定義されている。

(1) テ形（音韻）現象：
動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類（語幹末分節音の違い）によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

例えば、ある方言Δにおいて、＜書いてきた＞を［kakkita］というように、共通語の「テ」に相当する部分にいわゆる促音が現れるとする。一方、＜取ってきた＞は*［tokkita］とは言えず、［tottekita］という［te］が現れる形しか存在しないとする。このように動詞の種類の違いによって分布に偏りがある場合、方言Δはテ形現象を持つと言う。

本稿では、長崎県中南部本土諸方言にも周辺地域と同様にテ形現象が存在するかどうか、存在するとしたらどのタイプを示すか、さらにこのタイプが周辺地域のテ形現象のタイプとどのような関連性があるか、について分析する。

1．方 法 論

本稿では、初期の生成音韻論（Generative Phonology）の枠組みを利用する。この枠組みでは、基底形（underlying form）に音韻ルール（phonological rule）が線的（linear）に適用されることによって、音声形（phonetic form）が派生される。[2] 基底形は、心内辞書（mental

---

1 本稿の一部は、平成16～18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究（C）(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」（研究代表者：有元光彦・No.16520281）、及び平成19～20年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」（研究代表者：有元光彦・No.19652041）によるものである。フィールドワークにおいては、諫早市・大村市・小長井町・飯盛町の各教育委員会、小長井町公民館・飯盛町公民館に大変お世話になった。記して感謝する次第である。

2 以下、基底形は記号／　／で、音声形は記号［　］でそれぞれ括る。

lexicon）に登録されている辞書項目（lexical item）が形態的操作によって組み合わされたものである。従って、活用形の１つであるテ形の語構成（基底形）は、「動詞語幹＋テ形接辞」となっている。

動詞語幹には次のようなものがある。

(2) a. 子音語幹動詞：
/kaw/ ＜買う＞, /tob/ ＜飛ぶ＞, /jom/ ＜読む＞, /kas/ ＜貸す＞, /kak/ ＜書く＞, /kog/ ＜漕ぐ＞, /tor/ ＜取る＞, /kat/ ＜勝つ＞, /sin/ ＜死ぬ＞など
b. 母音語幹動詞：
/mi/ ＜見る＞, /oki/ ＜起きる＞, /de/ ＜出る＞, /uke/ ＜受ける＞など
c. 不規則語幹動詞：
/i/ ～ /itate/ ＜行く＞, /ki/ ＜来る＞, /s/ ＜する＞

ここでは、テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが、語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。

テ形接辞は、本稿で扱う方言においてはすべて /te/ である。テ形接辞の直後には、様々な単語が続く。例えば、[kita] ＜（～て）きた＞、[mijai] ＜（～て）みなさい＞、[miro] ＜（～て）みろ＞等である。

２．データ属性

本稿で挙げたデータは、平成20（2008）年２月にフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は、長崎県諫早（いさはや）市の旧市内、小長井（こながい）町（旧北高来郡（きたたかきぐん））、飯盛（いいもり）町（旧北高来郡）、そして大村（おおむら）市である。

坂口至（1998：2）によると、長崎県方言は「中南部本土方言」「北部本土方言」「南部離島方言」「北部離島方言」に大きく分類される。本稿で扱う諸方言はすべて「中南部本土方言」に属しているが、さらに細かくは、諫早市（旧市内）・小長井町・飯盛町方言が「諫早・北高（ほっこう）方言」に、大村市方言が「大村・彼杵（そのぎ）方言」に分類されている。

データは音声記号によって表記する。データの適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*はその音声形が不適格であることを、記号％はその音声形の方をよく使うとインフォーマントが判断していることをそれぞれ表す。

また、本稿では語幹末分節音がαである動詞を「α語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が /k/ である動詞、/kak/ ＜書く＞はｋ語幹動詞と呼ぶ。i_1, e_1語幹動詞は、語幹が１音節であるｉ, ｅ語幹動詞を、i_2, e_2語幹動詞は、語幹が２音節以上のｉ, ｅ語幹動詞をそれぞれ表す。

３．分　　析

本節では、各方言のデータを挙げつつ、テ形現象のタイプを考察していく。

本節で挙げるデータ表では、方言形のみを音声記号で表記する。表の左端列に挙げていない語幹が使われる場合には、その都度注で説明する。

3．1．諫早市方言

本節では、諫早市（旧市内）方言のテ形現象を観察する。動詞テ形のデータを【表1】に挙げる。テ形［A］のデータは西部地域の80歳女性のもの、テ形［B］のデータは中央部地域の80歳男性のものである。

【表1】 諫早市（旧市内）方言の動詞テ形

語　幹	テ　形［A］	テ　形［B］	意　味
kaw＜買う＞	ko:tekita *kokkita	ko:tekita *kokkita	買ってきた
tob＜飛ぶ＞	to:dekita	to:dekita *tokkita *toŋkita	飛んできた
jom＜読む＞	jo:dekita	jo:dekita	読んできた
kas＜貸す＞	kaʃitekita *kja:tekita	kja:tekita	貸してきた
okos＜起こす＞	okoʃitekita	—	起こしてきた
kak＜書く＞	kja:tekita	kja:tekita	書いてきた
kog＜漕ぐ＞	ke:dekita koidekita	kja:dekita koidekita *ke:dekita	漕いできた
tor＜取る＞	tottekita	tottekita	取ってきた
kat＜勝つ＞	kattekita	kattekita	勝ってきた
sin＜死ぬ＞	ʃindemirosa	ʃindemiro	死んでみろ（よ）
mi＜見る＞	mitekita *mittekita *mikkita	mitekita *mittekita *mikkita	見てきた
oki＜起きる＞	okitekita *okittekita *okikkita	okitekita *okittekita *okikkita	起きてきた
de＜出る＞	detekita *dettekita *dekkita	detekita *dettekita *dekkita	出てきた
uke＜受ける＞	uketekita *ukettekita *ukekkita	uketekita *ukettekita *ukekkita	受けてきた
it～itate＜行く＞	itatekita *itakkita	itekita *itatekita	行ってきた
ki＜来る＞	kitemiro	kitemiɴja	来てみろ
s＜する＞	ʃitekita *ʃikkita *sekkita	ʃitekita *ʃikkita *sekkita	してきた

【表１】において分かることは、s, g 語幹動詞において音便が多少異なるものの、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声には［te］または［de］しか現れていないということである。従って、諫早市（旧市内）方言は、有元光彦（2007a）で言うところの「非テ形現象方言」に分類される。[3]

３．２．小長井町方言

本節では、小長井町方言のテ形現象について記述する。動詞テ形のデータを【表２】に挙げる。テ形［C］、テ形［D］のデータは、いずれも80歳前後の男性で、地域も小長井町南央部である。

【表2】 小長井町方言の動詞テ形

語　幹	テ　形［C］	テ　形［D］	意　味
kaw ＜買う＞	ko:tekita *kokkita	ko:tekita *kokkita	買ってきた
tob ＜飛ぶ＞	tondekita *to:dekita	tondekita to:dekita *toŋkita	飛んできた
asob ＜遊ぶ＞	asondekita asundekita *asuŋkita	—	遊んできた
jom ＜読む＞	jondekita jo:dekita	jondekita *jo:dekita	読んできた
kas ＜貸す＞	kja:tekita *kakkita	kja:tekita kaʃitekita	貸してきた
kak ＜書く＞	kja:tekita	kja:tekita	書いてきた
kog ＜漕ぐ＞	ke:dekita	ke:dekita koidekita	漕いできた
tor ＜取る＞	mottekita[4]	tottekita	取ってきた
kat ＜勝つ＞	kattekita	kattekita	勝ってきた
sin ＜死ぬ＞	ʃindemiro	ʃindejaru[5]	死んでみろ
mi ＜見る＞	mitekita *mittekita *mikkita	mitekita *mittekita *mikkita	見てきた

3　「非テ形現象方言」といった方言タイプの名称については、基本的に有元光彦（2007a）に従うが、一部有元光彦（2007b）を参照する場合もある。
4　意味は＜持ってきた＞、語幹は /mot/ である。
5　意味は＜死んでやる＞である。

oki ＜起きる＞	okitekita okittekita *okikkita	okittekita *okikkita	起きてきた
de ＜出る＞	detekita *dettekita *dekkita	detekita *dettekita *dekkita	出てきた
uke ＜受ける＞	uketekita *ukettekita ukekkita	uketekita *ukettekita *ukekkita	受けてきた
it ～ itate ＜行く＞	*itekita ittekita itatekita itakkita	itakkita	行ってきた
ki ＜来る＞	kitemijai	kitemijai	来てみなさい
s ＜する＞	ʃitekita	ʃitekita	してきた

【表２】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声は、大部分［te］,［de］である。ただ、テ形［C］データの e_2 語幹動詞の場合のみ、［ukekkita］＜受けてきた＞というように、いわゆる促音が現れている。従って、小長井町方言は、有元光彦（2007a）で言うところの「真性テ形現象方言のタイプ TG 方言」ということになる。しかし、テ形［D］データでは*［ukekkita］＜受けてきた＞が不適格になっていることから、タイプ TG 方言が“崩壊”（非テ形現象化）しつつあると考えられる。

非テ形現象化とは、次のように定義される。

(3) 非テ形現象化の定義：
非テ形現象化とは、真性テ形現象が失われて（“崩壊”）、非テ形現象へと通時的に変化することである。

真性テ形現象が崩壊していると考えられる証拠は何種類かあるが、詳細は有元光彦（2007a：205–213）を参照されたい。

また、テ形現象以外においては、b，m 語幹動詞について、テ形［C］,［D］のデータ間に差異が見られる。これは音便現象の違いである。

３．３．飯盛町方言

本節では、飯盛町方言のテ形現象を記述する。動詞テ形のデータを【表３】に挙げる。

【表3】 飯盛町方言の動詞テ形

語幹	テ形			意味
	te/de 型	tʃi/dʒi 型	Q/N 型	
kaw ＜買う＞		ko:tʃikita	*kokkita	買ってきた
tob ＜飛ぶ＞		to:dʒikita	*tokkita *toŋkita	飛んできた
jom ＜読む＞		jo:dʒikita		読んできた
kas ＜貸す＞		ke:tʃikita	?kekkita[6]	貸してきた
kak ＜書く＞		ke:tʃikita	*kekkita	書いてきた
kog ＜漕ぐ＞		ke:dʒikita	*kekkita	漕いできた
oeg ＜泳ぐ＞		oe:dʒikita		泳いできた
tor ＜取る＞	tottekita			取ってきた
kat ＜勝つ＞	kattekita			勝ってきた
sin ＜死ぬ＞	ʃindekurero			死んでくれよ
mi ＜見る＞	mitekita *mittekita	*mitʃikita	*mikkita	見てきた
oki ＜起きる＞	okitekita okittekita	*okitʃikita	*okikkita	起きてきた
de ＜出る＞	detekita *dettekita	*detʃikita	*dekkita	出てきた
uke ＜受ける＞		uketʃikita	ukekkita	受けてきた
itate ＜行く＞		itatʃikita	itakkita	行ってきた
ki ＜来る＞	kitemijai			来てみなさい
s ＜する＞	ʃitekita			してきた

【表3】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分には、[te], [de]（「te/de 型」と呼ぶ）、[tʃi], [dʒi]（「tʃi/dʒi 型」と呼ぶ）、そしていわゆる促音（「Q/N 型」と呼ぶ）が現れている。これは、熊本県上天草市（旧天草郡）大矢野町維和方言と同じ、真性テ形現象と擬似テ形現象との「共生（symbiosis）タイプ（共生種）」である（cf. 有元光彦（2007a：205-207））。

まず、Q/N 型を見ると、[ukekkita] ＜受けてきた＞という e_2 語幹動詞のみが適格であるので（/itate/ ＜行く＞も e_2 語幹動詞である）、飯盛町方言は「真性テ形現象方言のタイプ TG 方言」であると考えられる。

次に、tʃi/dʒi 型を見ると、次のような分布が見られることが分かる。

6　男性 1 名（69歳）のみが、適格と判断した。

(4) 共通語の「テ」「デ」に相当する部分に［tʃi］，［dʒi］が現れないのは、語幹末分節音が /r，t，n，i_1，i_2，e_1/ のときである。

ここで、i，e 語幹動詞の語幹末分節音がどうなっているかを分析するために、否定形・過去形を観察してみる。次の表に挙げる。

【表4】 i, e 語幹動詞の否定形・過去形

	否定形	過去形
mi ＜見る＞	miN miraN	mita *mitta
oki ＜起きる＞	okiN %okiraN	okita %okitta
de ＜出る＞	%deN deraN	deta *detta
uke ＜受ける＞	ukeN *ukeraN	uketa *uketta

【表４】から分かるように、＜見る＞＜起きる＞においては、語幹は /mi/，/oki/ ではなく、/mir/, /okir/ のようになっているようである。＜出る＞においては、/de/ は言うまでもないが、/der/ も使われると考えられる。しかし、＜受ける＞においては、/uke/ という語幹であろう。

このことから、tʃi/dʒi 型における分布(4)は、次のように改訂される。

(5) 共通語の「テ」「デ」に相当する部分に［tʃi］，［dʒi］が現れないのは、語幹末分節音が /r，t，n/ のときである。

さらに、/r，t，n/ は［-syl，＋cor，-cont］という弁別素性（distinctive feature）の集合で表すことができる。[7] 以上のことから、飯盛町方言は「擬似テ形現象方言のタイプ PA 方言」であると言える。[8]

以上、Q/N 型、tʃi/dʒi 型、それぞれを見てきたが、最初に書いたように、飯盛町方言は「共生タイプ」であり、「真性テ形現象方言のタイプ TG 方言」と「擬似テ形現象方言のタイプ PA 方言」とが共生していることになる。

共生タイプの属性については、有元光彦（2007b：39）に次のように定義している。

7 本稿で使用する弁別素性は、［syl（labic）］（主音節性）、［cor（onal）］（舌頂性）、［cont（inuant）］（継続音性）である。

8 「タイプ PA 方言」という用語は、有元光彦（2007a）と有元光彦（2007b）において、異なる使い方をしている。前者では、記号 PA を便宜的に使用しているだけであるが、後者では真性テ形現象方言のタイプ TA 方言と対応する形で、記号 A を用いている。本稿では、後者にならって使用している。

(6) “共生”タイプの性質：
タイプΔｉ方言とタイプΔｊ方言が“共生”しているとすると、
a. Δｉと Δｊでは、「テ」に相当する部分に現れる音声の種類が異なる。
b. Δｊが持つコアルールの適用領域 Xj は、Δｉが持つコアルールの適用領域 Xi の真部分集合である。→ Xj ⊂ Xi
c. Δｊは Δｉよりも非テ形現象化が進行している。→Δｉ> Δｊ

(6)を飯盛町方言に当てはめてみると、Δｉが擬似テ形現象方言（タイプ PA 方言）、Δｊが真性テ形現象方言（タイプ TG 方言）に相当する。まず（6ａ）に関しては、Δｉには［tʃi］,［dʒi］が、Δｊにはいわゆる促音,［te］,［de］が基本的にそれぞれ現れているので、条件（6ａ）は満たされる。（6ｂ）に関しては、まずコアルールは次のように定式化されるｅ消去ルールである（cf. 有元光彦（2007b: 7））。[9]

(7) ｅ消去ルール：
e → φ / X^c] t ___]

Xi は｛［-syl, ＋cor, -cont］｝^{c}（＝/w, b, m, s, k, g, i, e/）、Xj は｛［-syl］｝^{c}（＝/i, e/）であるので、Xj ⊂ Xi という条件（6ｂ）も満たされる。よって、（6ｃ）を満たしているとすると、Δｉ（タイプ PA 方言）> Δｊ（タイプ TG 方言）となり、相対的には後者で非テ形現象化がより進行している。

以上より、飯盛町方言の場合、(6)の性質を持っていることが判明した。ただ、問題は（6ｃ）で、タイプ PA 方言よりもタイプ TG 方言の方が、非テ形現象化が進んでいるという結果である。従来の考え方によると、真性テ形現象方言よりも擬似テ形現象方言の方が非テ形現象化が進行しているという仮説を立てていたので、それに反することになる。これについては、第６章で議論する。

現時点までに発見された共生タイプの方言は、熊本県上天草市維和方言と長崎県南島原市加津佐町方言だけである。[10] 今回発見された飯盛町方言も、これら２方言と同様の属性を持っているということが分かった。それゆえ、仮説(6)もさらに支持されたということになろう。

ただし、共生タイプになぜ(6)のような性質があるのか、(6)の本質は何なのか、ということについては問題として残っている。この点について、有元光彦（2007b：40）には次のようなコメントがある。[11]

(8) (6)の本質に関するコメント：
(5)が言及していることは、ある方言タイプと、それより非テ形現象化が進んだ方言タイプとが“共生”する、ということである。さらには、「ある方言タイプ」とは最も安定性のある XA ＝［-syl, ＋cor, -cont］を適用領域の中に持つ方言タイプであ

9 記号 ^{c} は、補集合（complement）を表す。
10 長崎県国見町多比良方言（島原半島）にも、共生の形跡が残っているようである（cf. 有元光彦（2007b: 36））。
11 (8)に引用している「(5)」とは、ここでは(6)を指す。

る可能性が高い。この方言タイプは比較的“強い”種であろう。“強い”種と共生していれば、“弱い”種も安定して生存していられるのである。共生の中でも「片利共生」、または「寄生」であろう。

本質は明らかになっていないが、仮説(6)は言語接触（language contact）のやり方のパターンの１つを定式化したものであろう。従って、この共生タイプの発見及び解析は、言語接触の問題に対して理論的な貢献ができる証拠を与えてくれるものと考える。今後の課題である。

３．４．大村市方言

本節では、大村市方言のテ形現象について記述する。【表５】に動詞テ形のデータを挙げる。

【表5】 大村市方言の動詞テ形

語　幹	テ　形	意　味
kaw ＜買う＞	ko:tekita *kokkita	買ってきた
tob ＜飛ぶ＞	to:dekita tondekita *tokkita *toŋkita	飛んできた
asob ＜遊ぶ＞	aso:dekita	遊んできた
jom ＜読む＞	jondekita *jo:dekita	読んできた
ogam ＜拝む＞	ogodekita	拝んできた
kas ＜貸す＞	kaʃitekita *kja:tekita *ke:tekita	貸してきた
kak ＜書く＞	ke:tekita	書いてきた
kog ＜漕ぐ＞	koidekita *ke:dekita	漕いできた
oeg ＜泳ぐ＞	oe:dekita	泳いできた
tor ＜取る＞	tottekita	取ってきた
kat ＜勝つ＞	kattekita	勝ってきた
sin ＜死ぬ＞	ʃindekureŋka	死んでくれないか
mi ＜見る＞	mitekita *mittekita *mikkita	見てきた
oki ＜起きる＞	okitekita *okittekita *okikkita	起きてきた
de ＜出る＞	detekita *dettekita *dekkita	出てきた

uke ＜受ける＞	uketekita *ukettekita *ukekkita	受けてきた
usse ＜捨てる＞	ussetekita *ussekkita	捨ててきた
it ～ itate ＜行く＞	ittekita itatekita *itakkita	行ってきた
ki ＜来る＞	kiteminne	来てみないか
s ＜する＞	ʃitekita	してきた

【表５】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分には［te］,［de］しか現れていない。従って、大村市方言は「非テ形現象方言」である。

４．比　　較

本節では、本稿で扱った諸方言のテ形現象を比較する。まず、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声を【表６】にまとめる。[12]

【表6】　共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声の比較

語　　幹	諫早市（旧市内）・大村市方言	小長井町方言	飯盛町方言
kaw ＜買う＞	te	te	tʃi
tob ＜飛ぶ＞	de	de	dʒi
jom ＜読む＞	de	de	dʒi
kas ＜貸す＞	te	te	tʃi
kak ＜書く＞	te	te	tʃi
kog ＜漕ぐ＞	de	de	dʒi
tor ＜取る＞	te	te	te
kat ＜勝つ＞	te	te	te
sin ＜死ぬ＞	de	de	de
mi ＜見る＞	te	te	te
oki ＜起きる＞	te	te	te
de ＜出る＞	te	te	te
uke ＜受ける＞	te	Q/te	tʃi/Q

12　記号 Q はいわゆる促音を表す。記号（te）は、［te］が現れる場合と現れない場合があることを表す。記号―は、/it/ ＜行く＞という語幹が存在しないことを表す。

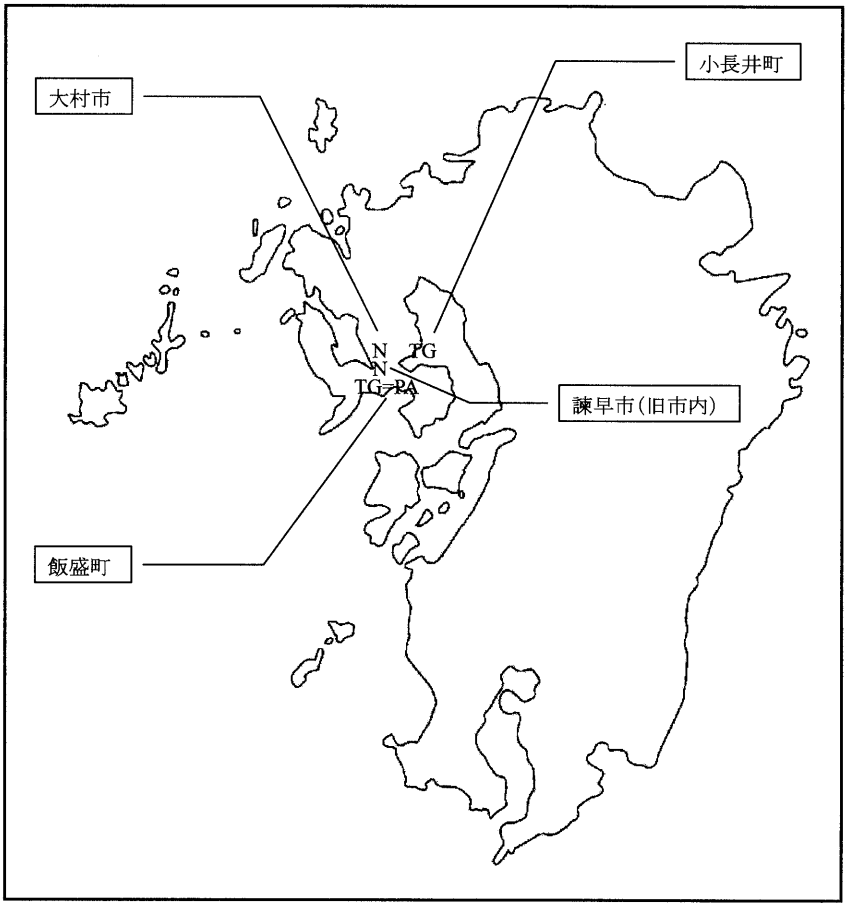
it ＜行く＞	(te)	(te)	—
ki ＜来る＞	te	te	te
s ＜する＞	te	te	te

第３節、及び【表６】でまとめたように、諫早市（旧市内）方言・大村市方言は非テ形現象方言である。小長井町方言は、真性テ形現象方言（タイプ TG 方言）である。飯盛町方言は、真性テ形現象方言（タイプ TG 方言）と擬似テ形現象方言（タイプ PA 方言）との共生タイプである。

５．共時的（地理的）考察

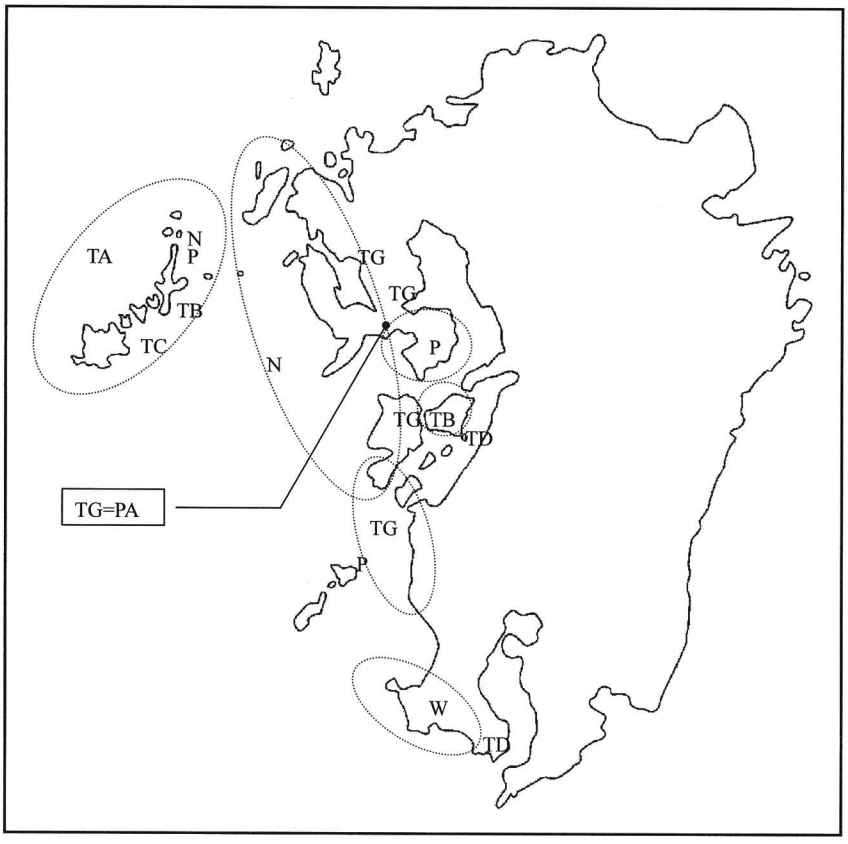
本節では、共時的な考察、特に地理的な問題について議論する。

本稿で取り上げた諸方言のテ形現象タイプの地理的分布を示すと、【図１】のようになる。記号 N は非テ形現象方言、記号 TG は真性テ形現象方言（タイプ TG 方言）、記号 PA は擬似テ形現象方言（タイプ PA 方言）をそれぞれ表す。また、記号＝はその両辺の２つの方言タイプが共生していることを表す。



【図１】 長崎県中南部本土方言のテ形現象の地理的分布

【図１】から、タイプTG方言が非テ形現象方言（N）に隣接していることが分かる。しかし、この地域だけを観察していたのでは、全体的な分布が分からないので、九州西部全体の概観図を【図２】に示す。【図２】は、有元光彦（2007a，2008a，2008b）に本稿での結果を加えたものである。



【図２】 九州西部方言のテ形現象の地理的分布

【図２】から分かるように、長崎県本土西部地域には広く非テ形現象方言（N）が分布しており、今回調査した諫早市（旧市内）・大村市方言も、この領域に含まれている。[13]

また、このエリアの東部に隣接して、小長井町のタイプTG方言が位置している。この分布は、小長井町の北西に位置する東彼杵町方言（駄地郷（だじ））がタイプTG方言であることから、特異な分布ではないようである（cf. 有元光彦（2008a））。全体的には、長崎県本土西部地域、及び熊本県天草下島西部地域の非テ形現象方言（N）の東側・南側を取り囲むように、タイプ

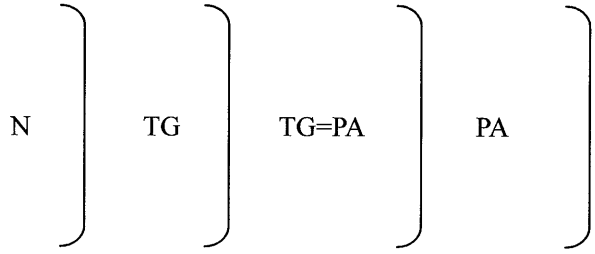
13　もちろん、【図２】において、非テ形現象方言（N）の領域は当該の点線の範囲だけではない。【図２】では九州西部だけが対象となっているため、そのような括り方になっているだけである。実際、何も表記していない地域の大部分は非テ形現象方言である可能性が高い。ただし、点線で括った非テ形現象方言と、何も表記していない地域に現れる非テ形現象方言とが、同じものであるかどうかは吟味する必要がある。今後の課題である。

TG 方言が位置していることになる。以上のことから、有元光彦（2008a：12）に仮定した次の仮説がさらに支持されることになる。

⑼　非テ形現象方言とタイプ TG 方言の地理的関係：
非テ形現象方言には、必ず真性テ形現象方言（タイプ TG 方言）が地理的に隣接している。

さらに、飯盛町の共生タイプの出現においても、地理的な説明が可能である。即ち、その西部に非テ形現象方言が、そしてその東部に擬似テ形現象方言（タイプ PA 方言）が位置しており、両者がちょうど接する位置に、共生タイプが生じているのである。

以上の議論を踏まえて、当該地域における地理的分布をモデル化すると、次のようになる。



【図３】　真性テ形現象の臨界地域における地理的分布のモデル

【図３】に示すように、非テ形現象方言（N）には必ずタイプ TG 方言が隣接している。また、擬似テ形現象方言（タイプ PA 方言）とタイプ TG 方言とが隣接している間に、共生タイプ（TG ＝ PA）が現れている。このような地理的分布が、まさに当該地域に並んで観察されるのである。

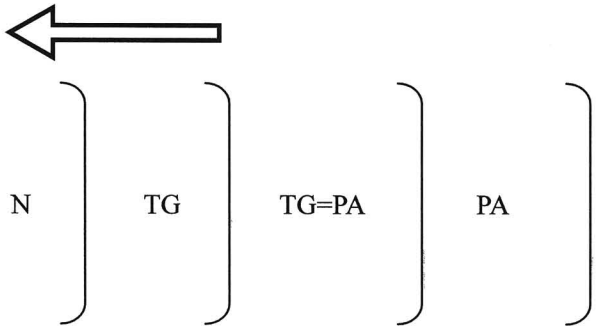
６．通時的考察

本節では、前節の地理的な考察を踏まえた上で、通時的な問題を議論する。

まず、有元光彦（2008a：12）で述べたように、前節で挙げた仮説⑼が成立するのであれば、通時的には、長崎県本土西部の非テ形現象方言（N）は、非テ形現象化の結果、真性テ形現象が崩壊して生じたものであると考えられる。そこで、次のような非テ形現象方言の出自に関する仮説を設定しておく。

⑽　非テ形現象方言の出自に関する仮説：
九州西部地域に現れる非テ形現象方言は、隣接する真性テ形現象方言（タイプ TG 方言）に非テ形現象化が起こり生じたものである。

ここで、通時的変化の方向性について考えてみる。⑽のような通時的変化を【図３】に当てはめたとき、左向きの矢印の方向に通時的変化が起こっていることは確かである。



【図４】 通時的変化の方向

それでは、タイプ TG 方言とタイプ PA 方言との通時的な関係はどのようになっているのだろうか。従来、有元光彦（2007a: 218）では、次のような仮説を立てている。

(11) 非テ形現象化の指向性 α ：

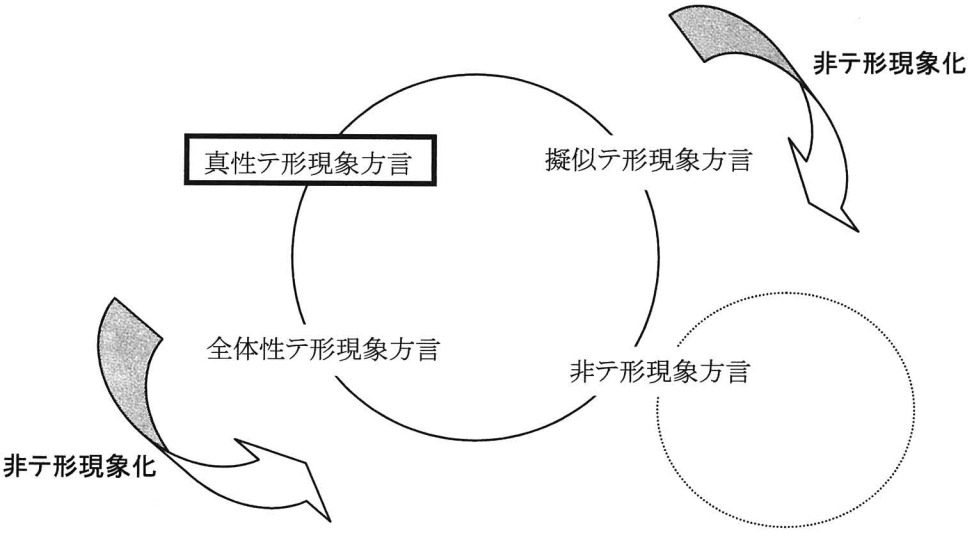
←----------→

真性テ形現象方言　　擬似テ形現象方言　　非テ形現象方言
全体性テ形現象方言

==========⇒

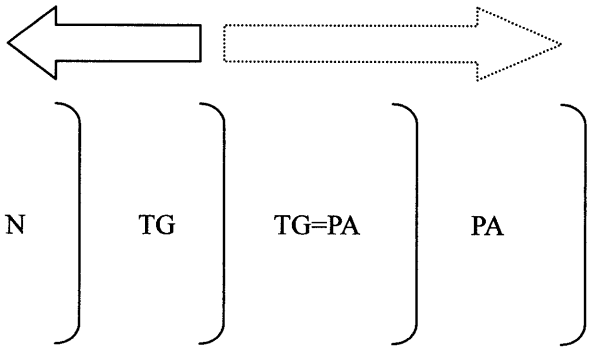
非テ形現象化

(11)の中の４種類のテ形現象方言どうしの関係を、さらに厳密化して図式化したものは、次のようになる（cf. 有元光彦（2007b: 61））



【図５】 非テ形現象化の指向性 α

(11)あるいは【図５】のような非テ形現象化の方向を考慮すると、当該地域に起こっている非テ形現象化の方向は次のようになると考えられる。



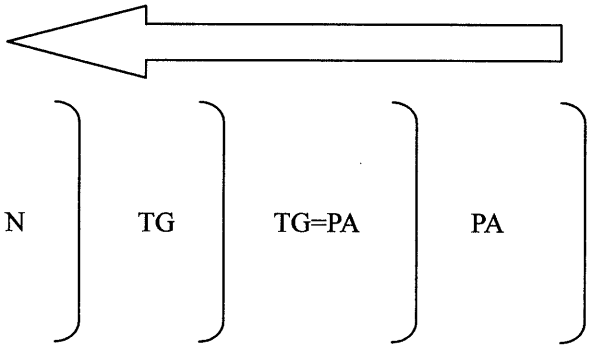
【図６】 通時的変化の方向

擬似テ形現象方言であるタイプ PA 方言は、真性テ形現象方言であるタイプ TG 方言よりも非テ形現象化が進行しているので、点線の矢印の方向に通時的変化が起こっていると考えられる。

しかし、ここで疑問が生じる。タイプ PA 方言は、本当にタイプ TG 方言よりも非テ形現象化が進行した状態なのであろうか。タイプ PA 方言は、タイプ TG 方言より均衡性（安定性）が低いのであろうか。均衡性については、有元光彦（2007a：184）に次のような仮説を立てている。

(12) “均衡化”の仮説：
真性テ形現象・擬似テ形現象を引き起こす（音韻ルールの適用）環境は、[–syl, +cor, –cont] という集合で均衡化する。

もしこの仮説が有効であるとすると、タイプ TG 方言よりもタイプ PA 方言の方が均衡性（安定性）が高いということになる。以上の主張が正しいとすると、通時的変化の方向は次のようになろう。



【図７】 通時的変化の方向

これを見ると、【図７】で示される通時的変化、即ち非テ形現象化の方向は、仮説(6)で示された記述と一致することが分かる。仮説(6)では、タイプ TG 方言とタイプ PA 方言が共生する場合、より均衡性（安定性）の高い方言タイプである後者と、より均衡性（安定性）が低い、より非テ形現象化が進行した方言タイプである前者とで構成されることが主張されている。仮説(6)、厳密には（６c）で主張されていることが、当該地域ではまさに地理的に連続して起こっているのである。それを【図７】が示していることに他ならない。

以上のことより、(11)あるいは【図５】で示された非テ形現象化の方向については修正を余儀なくされる。従来の考え方では、コアルール（e 消去ルール）の出力（output）を重視して、[tʃi], [dʒi] が現れるものよりも、いわゆる促音（または撥音）が現れるものの方が均衡性（安定性）が高いと考えていた。しかし、重視すべきは適用環境 X の方で、XG ＝［-syl］よりも、XA ＝［-syl, ＋cor, -cont］の方が均衡性（安定性）が高いと考えるべきであろう。つまり、テ形（音韻）現象を記述する場合、「動詞語幹末分節音の集合をどのように区切るか」という観点が最も重要であるということになる。コアルールにおける出力と適用環境とは、本来異なるレベルのもので、テ形（音韻）現象を司っている最大の因子は後者なのである。

もう一つの通時的な問題として、長崎市を中心とした地域で、なぜ非テ形現象化が極端に進行したのか、という問題が残る。そもそも、この地域は、有元光彦（2007a, 2007b）で言うところの最も均衡性（安定性）が低いタイプ TG 方言しか存在していなかったのかもしれない。本来、長崎県本土西部地域から熊本県天草下島西部地域にかけて帯状に広くタイプ TG 方言が存在していて、不安定であった。そこに、さらなる崩壊が起こり、非テ形現象化が進んだのかもしれない。そうすると、今後、鹿児島県北西部にあるタイプ TG 方言も崩壊する可能性があろう。

7．ま と め

本稿では、長崎県中南部本土方言を対象とし、次の３点に関して議論してきた。

(13) a. テ形（音韻）現象の記述
b. 共生タイプの新発見
c. 非テ形現象化の方向性の解明

まず、各方言のテ形現象の記述を通して、九州西部地域におけるテ形（音韻）現象の実態がさらに明らかになった。即ち、地理的には、長崎市を中心とした非テ形現象方言を取り囲むように、その東側及び南側に、タイプ TG 方言が隣接しているのである。また、そこで飯盛町方言という共生タイプが新たに発見されたことは、注目に値する。この方言タイプの発見は、通時的変化問題に対する理論的貢献を促す。事実、この共生タイプが関与する、非テ形現象化の流れが観察された。この観察によって、テ形（音韻）現象の本質の一端が明らかになった。即ち、「動詞語幹末分節音の集合をどのように区切るか」という分割の仕方が、この問題の最大のキーであることが判明した。

この最大のキーが示唆する、コアルールの出力と適用環境を異なるレベルとして捉える考え方は、すでに有元光彦（2007b, 2007c, 2007d）において、構成的アプローチ（constructive approach）として展開してきている。そこでは、出力を「変換者（transformer)」、適用環境

のXを「分割者（divider)」と呼び、これらの「情報子」（遺伝子のようなもの）を、エージェント（方言話者）が持っているという前提から出発する。詳細は別稿に譲るが、この理論的なツールがテ形（音韻）現象の本質を解明する一つの手立てになることは間違いなかろう。

言うまでもないが、テ形（音韻）現象の精密な調査と記述はまだ終わっていない。理論的貢献も視野に入れた厳密な観察が今後も必要とされる。

【参照参考文献】

有元光彦（2005）「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑤ことばの道—海の道—」『日本語学』 2005年９月号　明治書院　pp.74-82.

———（2006）「長崎県島原半島方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢（山口大学教育学部)』 第56巻　第１部　pp.47-61.

———（2007a）『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』 ひつじ書房

———（2007b）『方言研究の構成的アプローチの試み—九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現象—』 平成16～18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究（C）⑵「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」（No.16520281・研究代表者：有元光彦）研究成果報告書

———（2007c）「テ形音韻現象に対する構成的アプローチの試み」 九州方言研究会・第24回研究発表会（2007年７月７日）発表ハンドアウト

———（2007d）「音韻論・生物学・構成的アプローチ—九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象—」『社会言語科学会・第20回大会発表論文集』 社会言語科学会編　pp.190-193.

———（2008a）「長崎県中北部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢（山口大学教育学部)』 第57巻　第１部　pp.1-13.

———（2008b）「再訪:熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』（語学教育フォーラム第16号）寺村政男ほか編　大東文化大学語学教育研究所　pp.357-374.

Chomsky,N. & M.Halle（1968）*The Sound Pattern of English*, Harper & Row.

Kenstowicz,M.（1994）*Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.

小林隆ほか（2008）『シリーズ方言学１　方言の形成』 岩波書店

坂口至（1998）『長崎県のことば（日本のことばシリーズ42)』 明治書院